

人斬リ彦げん斎さい



今東光
東京創元社

人斬り彦齋

定價二百八十圓

著者 今 東光

昭和三十一年九月二十五日 初版發行
昭和三十一年十月二十日 三版發行

發行者 小林 茂

東京都新宿區新小川町一ノ一六

印刷者 中内佐光

東京都千代田區飯田町一ノ二三

發行所

株式會社

東京 創元社

東京都新宿區新小川町一ノ一六
電話九段(三三)八五一五
振替 東京 一五六五

印刷・嚙 製本・鈴木

萬一、落丁亂丁のものは、小社又は
お買求の書店にてお取替いたします

目次

人斬り彦齋

三

八尾別當

二二

跋文

二五

及カ
びバ
題ー
字装
畫

内
間
安
理

人斬り彦齋

昭和廿六年辛卯^{かのとう}四月六日、庭の鮮やかな嫩葉^{わかば}に音もなく雨が降りそそいで、櫻^{はな}の葩^{がら}が春泥にまみれてゐた。十五疊半といふ奇妙な大いさの座敷は、柱も欄干も黒く塗つたやうに光つて、いかさま京都府伏見町の侍屋敷の名残りで見られた。私の所望に對して主人は澤山の古文書や昔の書翰や旅日記の類を見せて下された。その中に當家の先祖由緒書といふ一通があった。

それによると先祖山本與兵衛といふのは、天正十年明智日向守光秀の部將三宅綱朝の守つてゐた勝龍寺城を攻める時、主君細川幽齋様の御馬廻り支配を勤め、この武功によつて世々細川家に仕へ、その後、妙解院^{めうけいん}様御代に至つて當主病死のため、その嫡子は十一歳で御小坊主^{おさぶちう}に就き山本丹齋と號した。やがて江戸定詰めとなつて數年相勤めた後、はじめて御茶道^{おさだう}にな

つて山本休益と改めた。然るに故あつて蓄髪して山本久右衛門と稱した。寛政四年、河尻川口御番を勤め、河尻町御奉行支配となつてゐる間に、舊姓を改めて河上と稱したといふことが分明した。千利休の七哲の一人に數へられた細川三齋公は自ら三齋流を始めた。三齋が道安を招いて三百石の知行を與へたのは有名な話である。三齋流の茶儀を肥後國では御國流と稱した。利休正傳の茶家は肥後國に三家あつた。古市（現今武田）、小堀、萱野（現今古田）で、これを古流と呼んでゐる。さうして細川家の江戸藩邸では遠州流を専らとしたさうである。

河上家は御國流を旨とした。世上で呼びならはしてゐる彦齋げんを、當家では彦齋ひこはると稱ぶことも知つた。しかしながら世に流布された彦齋げんの方が通りが好いので暫くそれに従ふことにする。彦齋の子に唯一人の彦太郎といふ男の子があり、その子が即ち當主河上利治君である。私は利治君と對座しながら彦齋の面影を描き出さうと試みるのであつた。

彦齋のことを書いたものを見ると、五尺足らずの柔さ男で、その外貌は溫柔婦女子のごとく、然も膽斗たんとうの如くであつたと記されてゐる。深淵のやうに清寂な双眸に、鬼氣を湛へ

『斬る』

と言へば必らず斬らねば措かなかつたと傳へられてゐる。薩摩の田中新兵衛、土佐の岡田以藏、而して肥後の河上彦齋は刺客中の錚々きやうきやうたる三羽鳥と謳はれたが、とりわけ人斬り彦齋

と異名で知られた彼をして高名ならしめたものは、佐久間象山先生を斃したからであらう。象山先生の死は公武合體論のためであつたとするのが定論のやうであるが、河上家の傳へでは別の一説が在るもののやうであつた。茶道に精しく、風流を解し、また國風を良くし、幕末浪士には似氣もなくお洒落であつた彦齋は、その身邊の所持品にも數奇を凝らしたといふことである。されば肥後造り細身の朱鞘しゆざやを帶び、金梨地の印籠をさげ、毎に眞新しい白足袋をはいて、起居尋常、出入音もなく物靜かに振舞つたと承つた。

その日、彦齋はお城から退出して新屋敷傘町の家に歸つて來た。いつもより顔色はすぐれなかつた。何人扶持ぶちといふ少祿ながら内福は豊かな河上家は庭なども相當に廣く取りこんで、御茶道で勤仕する家だけに塵ひとつとどめぬほど行きとどいて掃き清められてゐた。十徳とくを着て茶室に籠ると、靜かに獨りで點前して一服喫した。暮れるに間のない窓前の櫺紅葉はじもみぢが燃えるやうに明るかつた。茶室の窓を開いて肘をついて考へると、今日の城中での出來事が頭の中を去來する。若い胸に血が湧きたつて次第に唇を噛みしめてゐた。美少年だつた彦齋はお城坊主に上る前から肥後の若侍達の間で、稚兒さんの美名をほしいまみにしてゐた。御小坊主として頭を丸める前の匂やかな前髪は必ずしも若侍達ばかりでなく火の國の女達の胸をも灼いたであらう。お城勤めをするやうになつて間もなく、三澤家の天爲子てみこといふ小娘

が親と親との許婚者となつてゐた。けれども彦齋は三澤家にあまり出入りもしなかつたので、従つて天爲子を親しく見知らなかつた。それよりも父親が高麗門にあつた小森家から養子に來たので、小森家には何彼と親しく出入してゐた。同じ高麗門に住む隣家の村本家の昌子といふ娘とはよく遊んだので、この昌子の姿をばつたり見なくなつたのは子供心にも淋しかつた。それが御數奇屋に勤めるやうになつて御奥に昌子の大人びた姿を見た時に、彦齋はほのぼのと心が明るんだ思ひだつた。彦齋が御數奇屋坊主になると果して奥女中の噂の主となつた。さういふ奥女中のうちから何十通も艶書を貰つたこともある。初々しい彦齋の頬に血の色がさすのが女達には楽しかつたのであらう。けれども彦齋は村本の昌子をひそかに思つてゐたので、それ等の手紙には手も觸れなかつた。秋八月の御月見の晩、お城のお庭に主従が御宴を催した。能狂言の果ては奥女中達の遊藝が呼び物だつた。御庭の一隅に野點の御席をしつらへ、彦齋もまた半東に就いた。織りなすやうに侍達や奥女中達が華やかに装つて、蒸し暑い夜氣は濕ぼく更けていつた。

『彦齋様』

ふと呼ばれる聲に聴き耳を立てて四周を見廻すと小暗い草叢の片影に、薄物の夏衣裳を着た、御守殿風とでもいふ奥女中の姿をした昌子が銀の扇を口許にあてるやうにして立つてゐ

た。

『村本の昌子様か』

彦齋は草履を突つけて傍に駆け寄ると、早や女らしい物腰をした昌子を飽かず眺めた。

『お前様は何をなさるのだ』

『先刻の清元「田舎源氏露東雲」の三味線に上調子を弾いて居りました』

『あのお寺の場やかえ』

『はい』

『それは大層もない藝だねえ。何時の間にそんな藝を身につけて』

大きくなつたのだらうと彦齋は不思議な氣がするのだつた。少女から女になるのが一足跳びのやうな氣がした。さう言へば昌子の面差しさへ、よく遊んだ時分の幼な面影はうすれて、厚化粧の下に生々と夜目にも著しく輝く眼は、戀をする女のそのやうに見えた。

『さきほどお局様が御茶席で、お薄^{うす}を頂いて居られましたか、あの時から彦齋様を見て居りましたのに』

『何故お聲をかけて下さらなかつた。お人が悪いではないか』

『でも人目の中で恥しうて』

身體をくねらせると仙女香の匂ひが彦齋の鼻をくすぐつた。二人とも轟く胸を押へながら、口に出して語る言葉はあまりに平凡で、こんなことを言ふのではなかつたがと思ひつつ、あらぬ話をやり取りするのであつた。何やら人の聲あしおと音がして

『お人が見える……』

と囁いて銀扇で彦齋の手の甲を軽く打つと、昌子はひらりと身をひるがへして闇の中に消えて行つた。枝から枝に提灯がとまり、御殿の御縁のあたりには煌々と灯が輝いて盛んな笑ひ聲が湧き上る。鼓の音、大鼓の音、笛の音、三味線の音がして、御重役の誰某の酔歩の姿が影繪のやうに動いてゐた。彦齋は床しい匂ひを残して消えて行つた影法師を追ひさうにしたが、半東はんとうといふ役目を思ひ返して戻つた。お席の赤い毛氈がしつとりと夜露にしめつて、道安好み與次郎作の姥口うばぐちの釜かまが松風の音を立ててゐた。

彦齋の方では、もとより知る由もなかつたが、目の早い城中の若侍達の中には昌子を忍んで想つてゐる者があつたのだらう。さういふ一二の侍達の目に、昌子と彦齋がお月見の晩、忍び會ふてゐたと疑はれて妬まれたのは是非もないことであつた。今日といふ今日、臺子だいきの間に詰めてゐると、御廊下を通りながら明らかに嘲るやうな語調で

『茶道も武道も同じ稽古とはいひながら、命に別條がないだけ氣樂ちやなう。あれで御扶持

が頂けるなら、俺も坊主になりやよかつた。さうすれば女にも惚れられるかもしれないなかつたになう』

と喋りながら通り過ぎた。二三人の若侍達の哄笑を彦齋は耳が鳴る想ひで聞いた。茶道も武士の勤めとするのは幽齋、三齋兩公からの心得である。彦齋は昌子と親しく口をきいた月夜のことを思ひめぐらせると、はつとした。見られたことは間違ひがない。やるせない想ひだつたとはいへ、やましい行ひをしたとは思つてゐない彦齋は、そのまま御數奇屋をすべり出ると、人の居ないお角櫓に立つて、井芹川みづがはの峽谷をへだてて、はるかに秋晴れの花岡山一帯の山脈に目を遊ばせてゐると、睨にらみにじんて來るのであつた。さう言はれば確に彦齋は武道の心得がなかつた。林櫻園先生の門に遊んで和歌を學んではゐたが、劍槍も柔術の一手も知らなかつた。知らないことを耻にも苦にもしない茶道の世界から、肥後藩といふ梓の中に置いてゐる身分を省ると、何か大きなものを忘れてゐたやうに思はれた。そこから戻つて、氣づまりな臺子の問詰めの勤めをして、下城の太鼓の音に、はつと吾に返ると、驅り立てられる想ひを抱いてお城を退出した。そんなことを考へてゐると次第に落葉の散りしいた庭から蒼茫と暮れそめて行つた。

その夜は目が冴えて眠られなかつた。女にしても見まほしい美貌の御坊主の身内に烈々と

した火のやうな鬨魂が宿つてゐたのは吾ながら不思議だつた。家内が寢靜まるのを見さだめると、彦齊はむつくりと牀とこから起きあがり、手早く肌締きぢ絆きんに小倉の袴をつけ、赤檜の木刀を手にして庭に忍び出た。裏庭へ廻ると栗の木のもとに立つて、激しい氣合をこめながら發止と左右から打ち込みを試みた。稍や二三十本の打ち込みを右から左からとかたみのはりにやつてみると、満身に汗をかき、腕はくたびれ、木刀を持つ手は屢々痺れ、立つてゐるのも苦しかつた。五十本目には目が眩むやうだつた。八十本目には二三次膝をつくやうにしてよるめいた。百本目には本當にへたばつて仕舞つた。暫く休んでから漸く立ち上ることが出來たが、終りの二三十本には力も何にも入つてゐなかつたやうな氣がした。弱い氣合を四周の人に聞かれはしないだらうか。脆い大刀筋を誰かに隙見されはしなかつただらうか。そんな妄念が頭を支配して、無念無想などといふ境地は、てんで思ひも寄らなかつた。這ふやうにして暗い部屋に戻ると、そのまま引つくり返るやうにして床にもぐり込んで寢るのが精一杯だつた。

次の日も百本の打ち込みをした。三日目の百本の打ち込みには精も魂も盡きはたほど疲労困憊へうくわいした。お城へ上つて御數奇屋敷勤めに茶筌を握ると不覺にも手が慄へて泡立ちが悪かつた。五六日も經つと臺子の間で、靜かな秋の晝さがりなど居眠りしてゐる自身に氣がつい

で驚くのであつた。しかしながら彦齋は風の日も雨の夜も怠らず百本、つつの打ち込みは缺かさなかつた。母親はいつの間にか彦齋の稽古を知つて仕舞つた。

『御數奇屋衆に何の劍術ですか』

と澁い顔をして咎めた時に、彦齋は

『これも茶道の心得でござります』

嚴然と答へた。母親はそれきり黙つて仕舞つた。如何さま幽齋様は丹後田邊の御陣では敵に取りかこまれて御茶を遊ばしたし、三齋様は朝鮮の陣中でも御茶を遊ばされた。冬に近くなつた頃には、彦齋は打ち込み數を増して五百本から千本にしてゐた。茶杓をとる織い指は何時の間にか節くれ立ち、茶盃を捧げる手には肉刺が出た。しかしながらこの修業を細川家の家中で何人も知る者はなかつた。そればかりではない。彦齋はお城から退ると、部屋の中で本身の拔刀術を試みた。自得するまでは千本でも二千本でも抜いた。何人も師匠のない彦齋の劍術は、このやうにして鍊磨したものである。

天保五年甲午きのえうまに生れた彦齋の時世は、まだ大御所様と稱せられた十一代家齊將軍が西丸に御隠居になつて、文化文政の爛熟時代が尙ほ更ら頼れようとしてゐた。彼が四歳の時、即ち天保八年丁酉ひのととりの年には大阪に大鹽平八郎の亂があつた。幕府が本當の意味で鼎たなべの輕重を問は

れたのは實にこの叛亂からであらう。徳川家に弓を引く懸念があつた主體は諸大名であつた。その三百諸侯がすつかり懷柔されて骨抜きになつてゐた時に、大阪町奉行所付の一與力といふ微々たる存在が兵を擧げたといふ事實は、征夷大將軍の權威の偶像と傳説を打ち壞した烽火であつた。この一事は天下に志を得ない浪人に無限の光明を與へたに相違ない。大鹽の亂は短時日の裡に鎮壓することが出來たが、その見えない影響は志を失つてゐた者を鼓舞せしめるのに充分であつたと觀察される。當時の彦齋は幼少で何にも知らなかつたが、彦齋の生家のやうに武士から茶道に顛落した輕輩の人々を、虹を望み見るやうに朗然として眉をひらかしめたであらう。事實、彦齋の父なる仁は彦齋が、ひそかに劍術に魂を沈潛させてゐることを默過した。これ等の老いたる輕輩は、せめては自分等の子孫によつて埋もれた志を伸ばしめようと希つたのではあるまいか。

嘉永四年辛亥^{かといぬ}、十八歳の彦齋は三つ違ひの三澤天爲子^{てぬ}と結婚した。十五歳の花嫁は、まだおぼこ氣が抜けないで、夜は一つの夜着に枕を双つ並べて寝たが、夫の彦齋が御殿に上つた留守の晝のひとつときなどは、こつそりと姑に隠れてお人形さんに着物をきせたり、千代紙細工をしたりして遊んでゐた。彦齋はさういふ花嫁を面白さうに眺め、自分も時としては相手になつて綾取りなどして遊んでやつた。この人形のやうな花嫁は、茶事とは凡そ異つた彦齋